

『程氏家塾読書分年日程』訳注稿（八）

松野 敏之・中嶋 諒

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるもので、本誌一三号からの連載である。読書会の参加者は以下の通りであり、本稿は担当者（氏名の上に「※」を表記）の草稿を元に作成している。

宮下和太（麗澤大学モラロジー研究所専任研究員）・阿部光麿（早稲田大学文学学術院講師）・大場一央（早稲田大学文学学術院講師）・小池直（早稲田大学大学院博士後期課程）・田村有見恵（早稲田大学大学院博士後期課程）・原信太郎アレシヤンドレ（早稲田大学大学院博士後期課程）・佐々木仁美（成立学園中学高等学校教諭）・上村新治（早稲田大学大学院修士課程修了）・*中嶋諒（早稲田大学文学学術院講師）・*松野敏之（國士館大学文学部専任講師）

【凡例】

・底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、叢書集成本（清刊本・正誼堂全書本）・四庫全書本との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通仮字・同義語の類の異同は割愛した。

・解釈には、『程氏家塾読書分年日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿校注『程氏家塾読書分年日程』（黄山書社出版、一九九二年四月）を参照した。

・訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。

・原文・訳文中の「」を附した部分は、底本では割注に相当する。

・注釈で引用した原文には「」を附して訓読を示した。但し、一読して明らかな場合には省略している。

・訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾読書分年日程』卷三（底本 卷三・一丁 〳 卷三・十五丁裏九行）】

程氏家塾讀書分年日程卷三 旁證

正始之音序

夫載道傳世、書之功大矣。書有六義、其來已久。蓋自蒼頡始制文字、雖點畫偏傍之微、有精義入神之妙、有

自然布置之宜。後人推之、以爲有象形、指事、會意、諧聲、轉注、假借六者之別。雖分千衍萬、要不越此。夫象形者、寫其跡也。指事者、推其義也。會意者、合其形而兼乎義者也。諧聲者、合其聲以附乎形也。轉注者、形之變也。假借者、聲之變也。學者精辨乎此、則古今文字、若網之在綱、有條而不紊矣。是以古之小學之教、自十歲則教之書計、而大司徒之屬有保氏者、所以誘掖夫未成之材而教之道。藝者、六書居其一焉。蓋將使之自末以窮本、由藝以達道。因小學之流、泝乎大學之源、小而習之、終其身而不厭。古人於六書之義、其重若此。蒼頡而下、至周宣王時、有史籀者、演暢古文、著爲大篆。漢志謂、爲周人教學童之書。雖時與古文少異、而六義初未失也。自秦斯輩省改古籀、約爲小篆、而古文浸微。獄吏程邈、欲趨約易、變爲隸體、而籀篆亦廢。又有草書者、日趨簡便、而六義亦幾乎絕。漢人猶稍知尊崇字學、尉律試吏者、課以八體、而必使諷籀、至九千字以上。吏民上書、或効其不正者。然而古法既變、雜體紛然、非復蒼史之舊。其後楊雄之訓纂、相如之凡將、史游之急就、以致甄豐之改定古文、是雖有意於存古、要皆略而不備。

〔校異〕

a 程氏家塾：四庫全書本、此の四字無し。 b 卷三：叢書集成本、「卷之三」に作る。四庫全書本、「卷三」の下に「元〇程端禮〇撰」の七字あり。 c 旁證：四庫全書本、此の二字無し。 d 來：叢書集成本、「去」に作る。 e 由：叢書集成本・四庫全書本、「繇」に作る。 f 揚：叢書集成本、四庫全書本、「揚」に作る。

〔注釈〕

(1) 正始之音…曹采王柏『正始之音』。本誌一五号五三頁参照。

(2) 六義…六書に同じ。後漢許慎『說文解字』において提言された、漢字の形・音・義の成り立ちを説明する六つの原理。象形、指事、会意、諧声（形声）、転注、かじや仮借を指す。

(3) 蒼頡…蒼頡は、黄帝の臣下で、鳥や獣の足跡を見て文字を作ったとされる伝説上の人物。

(4) 保氏…六芸（礼楽射馭書数）などを教えることを掌る大司徒の属官。『周礼』卷一四・地官・大司徒・保氏参照。

(5) 史籀…周の宣王のとき、大篆（籀文）を定めたとされる人物。最古の字書となる『史籀』十五篇を著す。この書自体は現存しないが、いま『說文解字』に引く『史籀』所収の大篆二二三字を見ることができさる。

(6) 秦斯…李斯（？前二〇八）、河南上蔡の人。秦の丞相となり様々な政策を立案するも、秦始皇帝の死後に刑死させられた。大篆を簡約化した小篆による字体の統一は、彼の立案の一つである。伝は『史記』卷八七など。

(7) 程邈…程邈、字は元岑、げんしん陝西下杜の人。獄中にて小篆を簡便化した隸書三千字を作り、それを秦始皇帝に献上した。

(8) 八體…秦代に統一された漢字の八つの区別。字体による大篆・小篆・虫書・隸書、用途による刻符・摸印・署書・爰書の別をいう。

(9) 楊雄之訓纂…前漢揚雄『訓纂篇』。蒼頡以下、十四種の字書を編纂し、五千三百四十字を訓釈したもの。

揚雄（前五三〜後一八）は、字は子雲、四川成都の人。著に『太玄経』、『法言』、『方言』などの書がある。伝は『漢書』卷八七など。

(10) 相如之凡將：前漢司馬相如『凡將篇』一卷。既に亡佚したが、清馬国翰が編じた『玉函山房輯佚書』にその残文がまとめられている。

司馬相如（前一七九？〜前一一七）は、字は長卿、四川成都の人。その華麗な賦は、漢魏六朝時代の文人の模範となった。伝は『史記』卷一一七、『漢書』卷五七など。

(11) 史游之急就：前漢史游『急就篇』四卷、また『急就章』ともいう。姓名、飲食、器用などの分類をもって文字を列叙し、それに解釈を加えた字書。

史游は、その詳しい事跡は未詳だが、前漢元帝のとき黄門令の職に就いていたという。

(12) 甄豊：前漢甄豊（？〜一〇）は、字は長伯、湖北荊州の人。新王莽の腹心となり、大司空の職を務める。

これまでの八体を整理し、古文・奇字・篆書・佐書・繆篆・鳥虫書の六体に改定した。

〔通釈〕

『程氏家塾読書分年日程』卷三 傍証

『正始之音』序

いったい道載せてそれを世に伝えていくことは、文字の大きな功績だといえる。文字には六義（六書）があり、その来歴は非常に古い。やはり蒼頡が文字を制定してより、その点・画・偏・傍の微細なところにも、神妙なる意味や、おのずとそうなった適正さがあつた。後世の人々は、この蒼頡の制定した文字を推

し究め、象形・指事・会意・諧声（形声）・転注・仮借かしやの六義に區別されると考えた。文字の数が何千何万に及ぼうとも、結局のところ、この六義から外れることはないのである。

そもそも象形とは、軌跡を写し取ったものである。指事とは、意味を推し究めたものである。会意とは、形態に適いながら、意味も兼ね備えたものである。諧声とは、音声に適いつつ、形態も表しているものである。転注とは、形態が変化したものである。仮借とは、音声から変化したものである。学ぶ者がこの六義について詳らかに弁別できていれば、古今の文字は、例えば網に綱がつながっているように、筋目通りで乱れることはない。そういうわけで古の小学教育では、十歳より読み書きと算術を教え、大司徒の属官である保氏は、逸材となり得る人物を見出し、彼らに諸事の道（六芸など）を教えていた。芸とは六書（六義）が筆頭であった。これはやはり、末より本を極めさせ、芸より道に通達させ、小学の末流から大学の本源へと遡らせ、若年より学ばせて生涯厭うことがないようにさせるためだったのであろう。古人において、六義はどのように重視されていたのである。

著顔以後、周の宣王の御代に至って史籒しちやうが現れた。彼は古の書体を敷衍して大篆だいてんを創り出した。（その書『史籒』について）『漢書』芸文志には「周代の人々が学童の教育のために用いた書物である」と記されている。すでにその時、古の書体といくらか異つてはいたが、もとより六義は失われていなかった。しかし秦の李斯らが、古籒を簡便に改め小篆を定めて以来、古の書体はだんだんと衰えていった。また獄中にあつた程邈ていぱくが、簡約平易を計つて隸書を作つたことで、籒文（大篆）や小篆も廃れてしまった。さらに草書体が現れると、字体は日々簡便なものとなり、六義はほとんど絶えてしまったのである。

漢代の人々は、まだ僅かながらも文字学を尊崇することを知っていたので、当時の律令では、試験官は必ず八体を課し、古籀も九千字以上は暗誦させることとなっていたし、また官吏や庶民が上書する際にも、書体が正しくないものは弾劾されることとなっていた。しかし既に、古の書法は変化してしまっており、雑多な書体が紛然とあるだけで、かつての蒼頡や史籀の書とはほど遠くなってしまう。その後、揚雄『訓纂篇』、司馬相如『凡将篇』、史游『急就篇』が著され、さらには甄豊しんほうが古の書体を改定するまでになった。これらは古を存することに意を払っていたのではあるが、結局すべては粗略で不備なるものであった。

及後漢和安時、許慎受學賈逵、迺始兼采史籀雄斯、作說文解字、萬六百有餘、上之。其書詳博、最爲近古。然隸學行之既久、行草八分、雜然並出、視史籀反爲奇怪。鍾王而降、真草爭妍、顧野王廣益說文爲玉篇、始從其楷。孫愐增加陸法言切韻、更爲唐韻、說文雖存而學之者鮮矣。逮大曆中、李陽冰始尚說文、修正筆法、自謂篆籀中興。然時持臆說、排斥許氏、識者謂其筆力雖殊絕、而古體益壞。歷考古今、紛紛異尚、固無以加於說文也。然叔重止得象形、諧聲二義、而其餘復略、且病於子母之混淆。國初、詔徐鉉校定說文、雖曰不遺六書之體、然大略亦得二義而已。但說文無翻切、鉉始取孫愐音切附益之。大中祥符有詔刊正玉篇、廣韻而說文復衰。又有丁度集韻(14)司馬類篇(15)之屬、其名不一、或訓、或釋、或證、或辨、至王安石字說作、而又一以會意解之、固未有全六義者也。玉篇類形不類聲、廣韻類聲不類形。大抵形尚可考而聲爲難工、蓋形有定而聲無窮也。類形者少、類聲者多、類聲雖多而未有正其始音之的者。世革風移、轉相假借、方音清濁、譌變因乘、甚矣。

始音之難知也。

〔校異〕

a 奇：叢書集成本、「寄」に作る。 b 曆：叢書集成本、四庫全書本、「歴」に作る（乾隆帝・弘曆の避諱）。
c 祥：叢書集成本、「詳」に作る。 d 尚：叢書集成本、此の字無し。 e 無窮也：叢書集成本、「無窮者、
也」に作る。

〔注釈〕

(1) 許慎：中国最初の字書『説文解字』を著した後漢の学者。本誌一五号五九頁参照。

(2) 賈逵（後漢）：賈逵（後漢）（三〇〇〜一〇一）、字は景伯、陝西平陵の人。『国語』、『周礼』、『尚書』、『毛詩』に通じ、（後漢）明帝のとき『春秋左氏伝解詁』、『国語解詁』を献じた。伝は『後漢書』卷六六など。

(3) 八分：隸書における動勢を表す装飾的な筆法を美化し、様式を整えた漢字の書体の一つ。波磔（はた）（横筆が波のようにうねり、その末は右下にさがる）に富んでいるのが特徴である。

(4) 鍾繇（後漢）：鍾繇（後漢）と王羲之（晋）を指す。

鍾繇（二五一〜二三〇）は、字は元常、河南潁川の人。有能な政治家であるとともに書家としても知られる。臨模本「宣示表」、「還示帖」、「賀捷表」、「薦季直表」などが残る。特に楷書に巧みで、後世多くの人々にその書を慕われた。伝は『三国志』卷一三など。

王羲之（三〇三？／三二一？〜三七九？）は、字は逸少、山東琅邪の人。中国書道史上、最も優れた書家の一人。楷書・行書・草書の各書体について一家をなした。その「蘭亭序」は書の最高傑作といわ

れるが、現在は模写と模刻のみが残る。伝は『晋書』卷八〇など。

(5) 顧野王：唐顧野王（五一九〜五八二）、字は希馮、江蘇吳郡の人。天文地理に精通し、陳の国史編纂を総管した。著に『玉篇』の書がある。伝は『陳書』卷三〇、『南史』卷六九など。

(6) 玉篇：唐顧野王『玉篇』三十卷、また三十一卷。『說文解字』に倣いつつ、音義を主として一万六千九百十七字を解釈した字書。原本は一部分が日本に残ったが、中国では早くに散佚し、北宋陳彭年らによって重修された『大広益会玉篇』（二万八八九字収載）が広く用いられた。

(7) 孫愐：唐孫愐は、詳しい事跡は分らないが、天寶年間（七四二〜七五六）に河南陳州の司馬であったという。

(8) 陸法言切韻：唐陸法言等『切韻』は、百九十三の韻が立てられた韻書。すでに散佚し、今は敦煌及び北京故宮から発見された残刊がわずかに残るのみ。

陸法言は、陸詞（陸慈）、法言は字、河南臨漳の人。唐劉臻、唐顔之推等とともに『切韻』五卷を撰した。伝は『隋書』卷五八など。

(9) 唐韻：唐孫愐『唐韻』、また『広切韻』ともいう。唐陸法言『切韻』を訂正増補した書。久しく散佚していたが、民国羅振玉によって去声残欠一卷と入声全巻が発見され、影印刊行された。

(10) 李陽冰：唐李陽冰は、字は少温、河北趙郡の人。書家であり、篆書を書の一分野として確立させた功績がある。後漢許慎『說文解字』を整理し三十巻としたが、憶測による改訂が多かったため、北宋徐鉉の校訂本が刊行されてから散逸した。

(11) 子母之混淆：未詳。部首と親字が混乱することをいうか。

(12) 徐鉉：北宋徐鉉（九一六〜九九二）は、字は鼎臣、江蘇広陵の人。弟の徐鉉じよかいとともに篆書に通じ、しばしば二徐と並び称される。『説文解字』を校訂し、記事の訂正、及び校正確認された文字の追加を行った。この校訂本は「大徐本」と呼ばれ、現行の『説文解字』の定本となっている。

(13) 廣韻：『広韻』五卷。北宋陳彭年、北宋丘雍らが先行する『切韻』、『唐韻』を増訂して作った韻書。正式には『大宋重修広韻』と称される。二百六韻に分類し、巻末に「双声疊韻法」、「弁字五音法」等を附す。

(14) 丁度集韻：北宋丁度『集韻』十卷。本誌一七号二七八頁参照。

(15) 司馬類編：『類編』十五卷。北宋司馬光の著とされる。本誌一七号二七八頁参照。

(16) 王安石字説：北宋王安石『字説』二十卷、のち増補して二十四卷。独自の新説を立てて、後漢許慎『説文解字』など伝統の説を排斥した。今は佚して伝わらないが、張宗祥（輯録）『王安石《字説》輯』（福建人民出版社、二〇〇五年一月）に、その佚文がまとめられている。王安石については、本誌一七号二八四頁参照。

〔通釈〕

後漢の和帝（在位八九〜一〇六）、安帝（在位一〇七〜一二五）の御代に及び、許慎は賈逵かきより学問を授かり、そこで初めて史籀、揚雄、李斯を兼ねて採り入れ、一万六千字余りの字書『説文解字』を作つて、帝に奉つた。その書は、詳細博説であり、最も古に近いものであった。しかしその時、既に久しく隸書が流行

し、行書、草書、八分も雑然としてともに世に出ていたため、史籀（大篆）はかえって奇怪に映った。

鍾繇・王羲之以来、楷書と草書は美麗さを競っていた。そこに顧野王が『說文解字』を増補して『玉篇』を作ると、初めて楷書が優位に立った。孫愐は陸法言の『切韻』を増補して、さらに『唐韻』を作った。『說文解字』は残存はしていたものの、学ぶ者は少なかった。

大暦年間（七六六〜七七九）になると、李陽冰は『說文解字』を貴び、（世に流行している楷書の）筆法を修正し、自ら小篆、史籀（大篆）の中興であると公言した。しかし、時に彼はみずからの憶説を固持して、許慎を排斥した。そのため有識者は、筆力は秀逸ではあっても、古体はますます崩れてしまったと考えたのである。以上、古今の字書を歴々考えてみても、それぞれ紛然として尊ぶところが異なっているため、もとより『說文解字』に加えるべき何ものもなかった。ただし許慎は、象形・諧声の二義のみをうまく説いていたが、その他は簡略であったし、また部首と親字に混乱があることも欠点であった。

宋初に徐鉉に詔が下され、『說文解字』が校訂された。ここでは六書の体が余すことなく盛り込まれているとはいっても、大略としては先の二義を備えたのみであった。ただ『說文解字』には反切が無かったのを、徐鉉は孫愐の音切を採り入れて附益した。しかし、大中祥符年間（一〇〇八〜一〇一六）に詔勅が発せられて、『玉篇』や『広韻』が校正されたので、『說文解字』はふたたび衰退してしまった。また丁度『集韻』、司馬光『類篇』などの書もある。こういった書物は多々あるものの、訓義や釈義、論証や弁別をなすのみで、さらに王安石『字説』が世に出ると、専ら会意によって解釈されるようになった。まことに六義を全て備えている書はなかったのである。『玉篇』は字声ではなく字形によって分類し、逆に『広韻』は字形ではなく

字声によつて分類している。たいてい字形は考察できるのであるが、字声は精密にはしがたいものである。やはり字形には定まりがあるものの、字声は極まりのないものだからである。字形によつて分類する書は少なく、字声によつて分類する書は多い。ただ字声による分類は多いとはいつても、始音の確なものを正しく示した書はない。世も風俗も移り変わり、ますます文字は仮借しあい、字音の清濁は機に乗じて訛り変化している。始音の知りたいことは、何と甚だしいことであろうか。

栢知學最晩、小學工夫固大缺畧。諸經雖多釋音、每病始音之未明、既而求於說文、又病從聲之難曉。一日以說文翻爲楷字、又得李文簡類韻之編部叙、雖非叔重之舊、然亦頗便於討閱。既而又得來溱鄭公樵所著六書畧一篇、喜不釋手。蓋其訂覈精整、六義粲然、一掃千古之陋、而於假借一門、始音之義亦備、故獨取以附于說文翻楷之後。又得賈昌朝羣經音辨、取其三辨之詳說、徐音、賈辨、鄭畧、微有異同、互相補發、按古證今、訂譌正誤、以之讀聖賢之書、於音義亦庶幾焉。今合而一之、名曰正始之音。嗚呼、昔沈約以郊居賦示王筠、讀至雌霓〔五的反〕、撫掌笑曰、僕常恐人呼爲五雞反、遂以爲知音。以霓字從雨、從兒、義合諧聲、固當讀爲五雞反、烏在其爲知音哉。韓昌黎鄙爾雅、謂非磊落人。爾雅固未爲盡善、是亦學之一端、而遽鄙之、過矣。而況後世、自兒已習爲進取捷徑之學、固視此爲迂也。迂非栢所敢避、但自念日月斯邁、於六藝始求其一而未究其蘊、方自笑其苟焉耳。因併識其編鈔之歲月云。端平丙申秋仲晦王栢書。

〔校異〕

a 辨：底本、「麗」に作る。四庫全書本に拠って改めた。 b 亦：叢書集成本、「其」に作る。 c 五的反
：四庫全書本、「入声」に作る。

〔注釈〕

(1) 李文簡類韻：未詳。南宋^{南宋}李燾^{リタウ}（文簡は諡）の音韻についての著に『說文解字五音韻譜』十巻の書があるが、あるいはこれを指すか。本誌一七号二七六頁参照。

(2) 夾漈鄭公樵所著六書畧：南宋^{南宋}鄭樵^{ていしやう}（夾漈は号）『通史』二十略中の六書略。本誌一五号五九頁参照。

(3) 賈昌朝羣經音辨：北宋^{北宋}賈昌朝『群經音弁』七巻。本誌第一六号一二五頁。

(4) 沈約以郊居賦示王筠：「郊居賦」は、沈約^{しんやく}の代表作。『梁書』巻一三・沈約伝に採録し、「駕雌蜺之連卷、泛天江之悠永」（雌蜺^{しけい}の連卷に駕し、天江の悠永に泛ぶ）云々とある。また『梁書』巻三三・王筠^{おういん}伝には、「約製郊居賦、構思積時、猶未都畢、乃要筠示其草、筠讀至雌覓「五激反」連蹠、約撫掌欣抃曰、僕嘗恐人呼爲覓「五鷄反」」（約郊居の賦を製し、構思積みし時、猶ほ未だ都て畢はらず、乃ほ筠に其の草を示すを要む。筠讀みて雌覓「五激の反」連蹠に至るに、約掌を撫し欣抃して曰く、僕嘗に人呼びて覓「五鷄反」と為すを恐る」とある。

沈約（四四一〜五一三）は、字は休文、浙江武康の人。博学にして宋・齊・梁の三朝に仕え、武帝に命じられて『宋書』を編纂したことで知られる。また声韻についての著として『四声譜』の書がある。伝は『梁書』巻一三、『南史』巻五七など。

王筠（四八一〜五四九）は、字は徳柔・元礼、山東琅邪の人。文学と声韻に秀で、^{しやうとう}蕭統（昭明太子）

に重用された。著に『中書集』、『尚書集』などの書がある。伝は『梁書』卷三三など。

(5) 韓昌黎鄙爾雅、謂非磊落人：韓昌黎は、韓愈（昌黎は号）。本誌一七号二五八頁参照。『韓昌黎集』卷六「読皇甫湜公安園池詩書其後」に、「爾雅注虫魚、定非磊落人」〔爾雅の虫魚を注するは、定めて磊落の人に非ず〕とある。

(6) 王栢：清宋王栢（一一九七〜一二七四）、字は会之、号は長嘯・魯齋、浙江金華の人。朱熹門人の清宋何基に師事し、麗沢・上蔡両書院の師となった。著に『魯齋集』、『読易記』、『論語通旨』などの書がある。伝は『宋史』卷四三八、『宋元学案』卷八一など。

〔通釈〕

栢は学問を知ることがとても遅く、小学の工夫については、大いに欠略していた。諸経書には釈音が多く附されているが、常に始音が明らかでないという欠点があった。そのため、『説文解字』に始音を求めてはみるのだが、また音声から構成されている文字が分かりづらいという欠点があった。ある日、『説文解字』の反切によって楷書の文字を並びかえてみた。また李燾『説文解字五音韻譜』の編書を手したところ、その文字の配列は、許慎本来の通りではなかったけれども、始音を検討閲覧するには非常に便利であった。それからまた鄭樵の著した『通史』六書略の一篇を入手したところ、その内容に喜び、手離せなくなった。やはりこの書は、文字を整然と詳細に考訂し、六義が燦然と明らかに、千古にわたる陋識を一掃してくれており、仮借字一つとっても、始音の義は充分に備わっているもので、それを採り入れて『説文解字』の反切（徐鉉が附したもの）および楷書の後に附すこととした。また賈昌朝の『群經音弁』を入手して、そこに載せる

(字音清濁弁・彼此異音弁・字音疑混弁の)三弁の詳細な説も採り入れた。徐鉉の『説文解字』の附音・賈昌朝『群經音弁』・鄭樵『通史』六書略は、それぞれわずかな違いはあるが、相互に補い啓発してくれる。古を調べて今を明らかにし、訛誤を訂正しているのので、これによって聖賢の書を読んだならば、音義においてもまた道に近いことだろう。いまここに以上の諸書を合わせて一冊の書籍として、『正始之音』と名づけることとした。

ああ、むかし沈約しんやくは「郊居の賦」を王筠わういんに示した際、「雌覓しげび「五的の反切」」の箇所まで読むと、そこで手を打って笑っていった、「僕が常々恐れているのは、人々が「覓」字を五鶏の反切で発音しておきながら、音声を知っていると思ひ込んでいることだ」と。「覓」字は、雨と兒から構成され、六義では諧声にあたっている。もとより五鶏の反切で読むべきだとしてしまつては、どうして音声を知っているといえようか。韓愈は『爾雅』を軽んじて、「度量の大きな人(の作)ではない」とした。『爾雅』はもとより全てが正しいとはいえないが、学問の一端でもあるので、にわかになんか軽んじるのは誤りである。ましてや後世、幼児の頃より利禄榮達を得るために学問をしている人々から見れば、まことに迂遠なものである。迂遠さをわたし柏は決して避けるものではないが、ただ日月に邁進し、六芸においてその最初を学びながら、いまだ奥深さを究めておらず、おろそかにしていることを自嘲するのみである。ここに併せて編鈔の経緯を記しておく。

端平丙申(一二三四)秋仲晦、王柏書す。

字音清濁辨

賈昌朝課

王、〔千方切〕君也。

〔于放切〕君有天下也。

子、〔將此切〕男女通稱。

〔將吏切〕子育下民。

女、〔尼呂切〕女未嫁稱。

〔尼据切〕以女嫁人。

妻、〔七奚切〕與夫齊者。

〔七計切〕以女適人。

親、〔七鄰切〕媼也。

〔七吝切〕婚媼相會。

賓、〔必鄰切〕客也。

〔必吝切〕客以禮會。

衣、〔於希切〕身章也。

〔於既切〕施諸身。

冠、〔古桓切〕首服。

〔古玩切〕加諸身。

枕、〔章荏切〕藉首木。

〔章鳩切〕首在木。

飲、〔於錦切〕酒漿。

〔於禁切〕所以歡。

麾、〔許爲切〕旌旗。

〔許類切〕所以使人。

冰、〔筆凌切〕水凝。

〔彼凭切〕所以寒物。

膏、〔古刀切〕脂凝。

〔古到切〕所以潤物。

文、〔無分切〕采章。

〔亡運切〕所以飾物。

粉、〔夫吻切〕白飾。

〔夫問切〕所以傳物。

巾、〔居銀切〕帨也。

〔居吝切〕所以飾物。

熏、〔許云切〕煙出也。

〔許運切〕所以蕘物。

陰、〔於金切〕氣之濁也。

〔於禁切〕所以庇物。

采、〔倉宰切〕取也。

〔倉代切〕所以取食。

輕、〔去盈切〕浮也、對重。

〔苦政切〕所以自用。

兩、〔力獎切〕偶數。

〔力讓切〕物相偶。

三、〔蘇甘切〕奇數。

〔蘇暫切〕審用其數。

左、〔臧可切〕左手、對右。

〔臧箇切〕左右助之。

右、〔云久切〕右手、對左。

〔尤救切〕左右助之。

先、〔思天切〕前也、對後。

〔思見切〕前之。

卑、〔補支切〕下、對高。

〔部止切〕下之。

遠、〔雨阮切〕疏、對近。

〔于眷切〕疏之。

離、〔力支切〕兩也。

〔力智切〕兩之。

傍、〔蒲郎切〕近也。

〔蒲浪切〕近之。

空、〔苦紅切〕虛也。

〔苦貢切〕虛之。

沈、〔直金切〕沒也、對浮。

〔直禁切〕沈之。

重、〔直龍切〕再也。

〔直用切〕再之。

數、〔色主切〕計之也。

〔色句切〕計有多少。

量、「龍張切」酌之也。

〔龍向切〕酌有大小。

度、「徒洛切」約也。

〔徒故切〕約有長短。

高、「古刀切」崇也。

〔古到切〕度高幾許。

深、「式金切」下也。

〔式禁切〕測深幾許。

長、「持良切」永也、對短。

〔持亮切〕揆長幾許。

廣、「古黨切」濶也、對狹。

〔古曠切〕量廣幾許。

〔校異〕

a 字音：叢書集成本、「字音」の上に「賈昌朝誤」の四字あり。 b 賈昌朝誤：叢書集成本、此の四字無し。

c 身：叢書集成本・四庫全書本、「首」に作る。 d 熏：叢書集成本・四庫全書本、「薰」に作る。 e 臧

：叢書集成本、「臧」に作る。 f 雨：叢書集成本、「與」に作る。 四庫全書本、「兩」に作る。 g 浪：叢

書集成本、「浪」に作る。

〔注釈〕

(1) 字音清濁辨：以下「字音疑混弁」(本稿一六九頁)まで、^{北本}賈昌朝『群經音弁』卷六に収める。

(2) 切：反切。既知の二字の音韻を用いて字音を表す方法。上字の頭子音と下字の韻母とを合わせる。本

稿では字音の区別のため、下字の韻母が平声の場合には「○」を、仄声の場合には「●」を附し、とも

に仄声の場合は以下の別のみ示した。上声 || 「●上」、去声 || 「●去」、入声 || 「●入」。

〔通釈〕

字音の清濁の区別

賈昌朝撰

王、〔千方[○]の切〕君主。

〔于放[○]の切〕君主が天下を領有すること。

子、〔將此[●]の切^上〕男女の通称。

〔將吏[○]の切^去〕君が人民を育むこと。

女、〔尼呂[●]の切〕まだ嫁いでいない娘の呼称。

〔尼据[○]の切〕娘を嫁がせること。

妻、〔七奚[○]の切〕夫とつがいとなつた者。

〔七計[●]の切〕娘を嫁がせること。

親、〔七鄰[○]の切〕姻戚。

〔七吝[●]の切〕縁組みのために会すること。

賓、〔必鄰[○]の切〕賓客。

〔必吝[●]の切〕賓客が礼をもつて会すること。

衣、〔於希[○]の切〕身につける飾り。

〔於既[●]の切〕身につけること。

冠、〔古桓[○]の切〕頭につける衣装。

〔古玩[●]の切〕身に載せること。

枕、〔章荏[●]の切^上〕頭を敷き置く木。

〔章鳩[○]の切^去〕頭を木に載せること。

飲、〔於錦[●]の切^上〕酒漿。

〔於禁[○]の切^去〕啜り飲むこと。

麾、〔許為[○]の切〕旌旗。

〔許類[●]の切〕他人を使役する（指図する）こと。

冰、〔筆凌[○]の切〕水が凝固したもの。

〔彼凭[○]の切〕物を冷たくさせること。

膏、〔古刀[○]の切〕脂が凝固したもの。

〔古到[●]の切〕物を潤すこと。

文、〔無分[○]の切〕彩章。

〔亡運[●]の切〕物を飾ること。

粉、〔夫吻[●]の切^上〕白いよそおい。

〔夫問[○]の切^去〕物に付着すること。

巾、〔居銀[○]の切〕布巾。

〔居吝[●]の切〕物を飾ること。

薰、〔許云の切〕煙が立ち上ること。
 陰、〔於金の切〕氣の濁つたもの。
 采、〔倉宰の切〕取ること。
 輕、〔去盈の切〕浮くこと、重の対義語。
 兩、〔力奨の切〕偶数。
 三、〔蘇甘の切〕奇数。
 左、〔臧可の切〕左手、右の対義語。
 右、〔云久の切〕右手、左の対義語。
 先、〔思天の切〕前方、後の対義語。
 卑、〔補支の切〕下方、高の対義語。
 遠、〔雨阮の切〕疎遠、近の対義語。
 離、〔力支の切〕二つのもの。
 傍、〔蒲郎の切〕近いこと。
 空、〔苦紅の切〕虚空。
 沈、〔直金の切〕沈没。浮の対義語。
 重、〔直龍の切〕繰り返し。
 数、〔色主の切〕計ること。

〔許運の切〕物を乾かす（いぶす）こと。
 〔於禁の切〕物をおおうこと。
 〔倉代の切〕食をとること。
 〔苦政の切〕自身を用いる（他人をあなどる）こと。
 〔力讓の切〕物が二つ対になること。
 〔蘇暫の切〕きちんと三度すること。
 〔臧箇の切〕左右の者が手助けすること。
 〔尤救の切〕左右の者が手助けすること。
 〔思見の切〕進むこと。
 〔部止の切〕下ること。
 〔干眷の切〕疎んじること。
 〔力智の切〕二つにすること。
 〔蒲浪の切〕近づくこと。
 〔苦貢の切〕虚しくすること。
 〔直禁の切〕沈むこと。
 〔直用の切〕繰り返すこと。
 〔色句の切〕ものの多少を計ること。

量、〔龍張の切〕酌量すること。

度、〔徒洛の切〕測量。

高、〔古刀の切〕崇高。

深、〔式金の切〕下方。

長、〔持良の切〕長久。短の対義語。

広、〔古党の切〕闊大。狭の対義語。

〔龍向の切〕ものの大小を考えること。

〔徒故の切〕ものの長短を測ること。

〔古到の切〕高さがどれだけか測ること。

〔式禁の切〕深さがどれだけか測ること。

〔持亮の切〕長さがどれだけか測ること。

〔古曠の切〕広さがどれだけか測ること。

染、〔而琰の切〕濡也。

折、〔之舌切〕屈也。

別、〔彼列切〕辨也。

貫、〔古桓切〕穿也。

縫、〔符容切〕紕也。

過、〔古禾切〕逾也。

斷、〔都管切〕絶也。

盡、〔即忍切〕極也。

分、〔方云切〕別也。

〔而豔切〕既濡。

〔市列切〕既屈。

〔皮列切〕既辨。

〔古玩切〕既穿。

〔符用切〕既紕。

〔古臥切〕既逾。

〔徒管切〕既絶。

〔慈忍切〕既極。

〔扶問切〕既別。

解、〔古買切〕釋也。
行、〔戶庚切〕履也。
施、〔式支切〕行也。
相、〔息良切〕共也。
從、〔疾容切〕隨也。
走、〔臧苟切〕趨也。
奔、〔逋昆切〕趨也。
散、〔蘇亶切〕分也。
還、〔胡關切〕回也。
和、〔戶戈切〕調也。
調、〔徒聊切〕和也。
凝、〔魚凌切〕結也。
彊、〔其良切〕堅也。
齊、〔徂奚切〕等也。
延、〔余然切〕長也。
著、〔陟畧切〕置也。
冥、〔彌經切〕暗也。

〔胡買切〕既釋。
〔下孟切〕履迹。
〔式鼓切〕行惠。
〔息亮切〕共助。
〔秦用切〕隨後。
〔臧候切〕趨向。
〔逋悶切〕趨後。
〔蘇岸切〕分布。
〔胡慣切〕回遶。
〔胡臥切〕調絮。
〔徒料切〕和適。
〔牛證切〕凝固。
〔其亮切〕堅固。
〔在計切〕等平。
〔余見切〕長引。
〔直畧切〕置定。
〔彌定切〕暗甚。

塵、〔池珍切〕土也。

煎、〔子仙切〕烹也。

炙、〔之石切〕炮也。

收、〔式周切〕斂也。

斂、〔力檢切〕收也。

陳、〔池珍切〕列也。

呼、〔火吳切〕聲也。

悔、〔呼罪切〕過也。

如、〔人諸切〕似也。

應、〔於陵切〕當也。

當、〔都郎切〕宜也。

帥、〔所律切〕總也。

將、〔即良切〕持也。

監、〔古銜切〕莅也。

使、〔疏土切〕命也。

障、〔于元切〕引也。

障、〔之良切〕壅也。

〔直吝切〕土汚。

〔子賤切〕烹久。

〔之夜切〕炮肉。

〔式救切〕斂之。

〔力劍切〕收聚。

〔直刃切〕成列。

〔火故切〕大聲。

〔呼內切〕改過。

〔而預切〕審似。

〔於證切〕相當。

〔都浪切〕得宜。

〔所類切〕總人。

〔即亮切〕持衆。

〔古陷切〕莅事者。

〔疏事切〕將命者。

〔于眷切〕引者。

〔之亮切〕壅者。

防、	〔符方切〕	禦也。	〔符況切〕	禦者。
任、	〔如林切〕	堪也。	〔如禁切〕	堪其任。
中、	〔陟弓切〕	任也。	〔陟仲切〕	任得宜。
閒、	〔古閑切〕	中也。	〔古覓切〕	厠其中。
足、	〔子六切〕	止也。	〔子預切〕	益而止。
勝、	〔讖烝切〕	舉也。	〔詩證切〕	舉之克。
觀、	〔古完切〕	視也。	〔古玩切〕	謂視。
號、	〔胡刀切〕	呼也。	〔胡到切〕	謂呼。
爭、	〔側莖切〕	鬪也。	〔側迸切〕	謂鬪。
迎、	〔魚京切〕	逆也。	〔魚映切〕	謂逆。
攻、	〔古紅切〕	伐也。	〔古送切〕	謂伐。
守、	〔式帚切〕	保也。	〔式救切〕	謂保。
選、	〔思兗切〕	擇也。	〔思絹切〕	謂擇。

〔校異〕

a 琰：叢書集成本、「刻」に作る。
 「徒」に作る。 d 彌：叢書集成本・四庫全書本、「弭」に作る。
 e 彌：叢書集成本・四庫全書本、「弭」に作る。
 c 陟：叢書集成本、
 「徒」に作る。 f 預：叢書集成本、「豫」に作る。
 g 得：叢書集成本、「其」に作る。 h 預：叢書集成本、「豫」に作る。

に作る。 i 蒸：叢書集成本、「蒸」に作る。

〔通釈〕

染、〔而・琰の切〕濡らす。
折、〔之・舌の切〕曲げる。
別、〔彼列の切〕分ける。
貫、〔古・桓の切〕穿つ。
縫、〔符容の切〕綴る。
過、〔古・禾の切〕越える。
断、〔都・管の切〕絶つ。
尽、〔即・忍の切〕極める。
分、〔方・云の切〕別れる。
解、〔古・買の切〕解釈する。
行、〔戸・庚の切〕履行する。
施、〔式・支の切〕施行する。
相、〔息・良の切〕共にする。
従、〔疾・容の切〕随う。
走、〔臧・荷の切〕走る。

〔而・豔の切〕濡れている。
〔市・列の切〕曲がっている。
〔皮・列の切〕分かれている。
〔古・玩の切〕穿つてある。
〔符・用の切〕綴つてある。
〔古・臥の切〕越えている。
〔徒・管の切〕絶えている。
〔慈・忍の切〕極まっている。
〔扶・問の切〕別れている。
〔胡・買の切〕解釈してある。
〔下・孟の切〕先人の事跡を継承する。
〔式・豉の切〕恵みを施す。
〔息・亮の切〕共に助け合う。
〔秦・用の切〕後ろに付き従う。
〔臧・候の切〕前へ走る。

奔、〔浦昆の切〕走る。
 散、〔蘇賣の切^上〕分かれる。
 還、〔胡閑の切〕めぐる。
 和、〔戸戈の切〕調える。
 調、〔徒聊の切〕和らげる。
 凝、〔魚凌の切〕固まる。
 疆、〔其良の切〕堅い。
 齊、〔徂奚の切〕等しい。
 延、〔余然の切〕長くする。
 著、〔陟略の切^入〕定着させる。
 冥、〔弥経の切〕暗い。
 塵、〔池珍の切〕土。
 煎、〔子仙の切〕煮る。
 炙、〔之石の切^入〕あぶる。
 收、〔式周の切〕あつめる。
 斂、〔力檢の切^上〕収める。
 陳、〔池珍の切〕列。

〔浦悶の切〕後ろへ走る。
 〔蘇岸の切^去〕あちこちに分かれる。
 〔胡慣の切〕ぐるぐるめぐる。
 〔胡臥の切〕しなやかに調える。
 〔徒料の切〕調和させる。
 〔牛証の切〕かたく固まる。
 〔其亮の切〕とても堅い。
 〔在計の切〕びたりと等しい。
 〔余見の切〕長く引っぱる。
 〔直略の切^入〕しっかりと定着させる。
 〔弥定の切〕とても暗い。
 〔直吝の切〕汚れた土。
 〔子賤の切〕長く煮る。
 〔之夜の切^去〕肉をあぶる。
 〔式救の切〕物をあつめとる。
 〔力劍の切^去〕あつめ収める。
 〔直刃の切〕ならぶ。

呼、〔火呉の切〕声。
 悔、〔呼罪の切〕過ちを犯す。
 如、〔人諸の切〕似ている。
 応、〔於陵の切〕当てはまる。
 当、〔都郎の切〕よろしい。
 帥、〔所律の切〕統べる。
 將、〔即良の切〕持す。
 監、〔古銜の切〕臨む。
 使、〔疏士の切〕使命。
 援、〔于元の切〕引く。
 障、〔之良の切〕塞ぐ。
 防、〔符方の切〕守る。
 任、〔如林の切〕堪える。
 中、〔陟弓の切〕任務。
 間、〔古閑の切〕中間。
 足、〔子六の切〕止まる。
 勝、〔識悉の切〕挙げる。

〔火故の切〕大声。
 〔呼内の切〕過ちを改める。
 〔而預の切〕酷似している。
 〔於証の切〕しつくりと当てはまる。
 〔都浪の切〕よろしきを得ている。
 〔所類の切〕人々を統べる（率いる）。
 〔即亮の切〕衆人を持す（率いる）。
 〔古陷の切〕ことに臨む人。
 〔疏事の切〕使命をおこなう人。
 〔于眷の切〕引く人。
 〔之亮の切〕塞ぐ人。
 〔符況の切〕守る人。
 〔如禁の切〕任務に堪える。
 〔陟仲の切〕しつかりと任務にあたる。
 〔古寛の切〕中に交わる。
 〔子預の切〕益あるところで止まる。
 〔詩証の切〕ことを挙げて勝つ。

観、〔古完の切〕 視る。

号、〔胡刀の切〕 呼ぶ。

争、〔側莖の切〕 戦う。

迎、〔魚京の切〕 迎える。

攻、〔古紅の切〕 伐つ。

守、〔式帚の切〕 保つ。

選、〔思亮の切〕 択ぶ。

〔古玩の切〕 視ることをいう。

〔胡到の切〕 呼ぶことをいう。

〔側莖の切〕 戦うことをいう。

〔魚映の切〕 迎えることをいう。

〔古送の切〕 伐つことをいう。

〔式救の切〕 保つことをいう。

〔思絹の切〕 択ぶことをいう。

聽、〔他丁切〕 聆也。

禁、〔居吟切〕 制也。

知、〔張離切〕 識別也。

思、〔息茲切〕 慮度也。

評、〔蒲兵切〕 訂也。

論、〔魯昆切〕 説也。

便、〔蒲連切〕 欲也。

好、〔呼皓切〕 善也。

〔他定切〕 聆謂之。

〔居蔭切〕 制謂之。

〔張義切〕 識謂之。

〔息吏切〕 慮謂之。

〔蒲柄切〕 訂語謂之。

〔魯困切〕 説言謂之。

〔蒲練切〕 得所欲謂之。

〔呼到切〕 嚮所善謂之。

惡、〔烏各切〕否也。

〔烏路切〕心所否謂之。

喜、〔虛巳切〕悅也。

〔虛記切〕情所悅謂之。

怨、〔於元切〕尤之也。

〔紆願切〕意有所尤謂之。

操、〔七刀切〕持之也。

〔七到切〕志有所持謂之。

語、〔仰舉切〕言也。

〔牛据切〕以言告之謂之。

令、〔力丁切〕使也。

〔力政切〕所使之言謂之。

教、〔古着切〕使也。

〔古孝切〕所使之言謂之。

雨、〔王矩切〕天澤也。

〔王遇切〕雨自上下。

種、〔之隴切〕五穀也。

〔之用切〕謂播種。

宿、〔思六切〕止也。

〔思宥切〕日星所止舍。

生、〔所庚切〕育也。

〔色慶切〕謂育子。

乳、〔耳主切〕生子也。

〔而遇切〕謂飼子。

吹、〔昌垂切〕响也。

〔尺偽切〕謂响氣。

烝、〔章升切〕氣噓也。

〔之勝切〕謂氣噓而澤。

經、〔古蠶切〕東西也。

〔古定切〕東西其緯。

緣、〔羊專切〕循也。

〔羊絹切〕循飾其傍。

編、〔補年切〕次也。

〔步典切〕謂所列次。

封、〔甫容切〕授爵土也。〔甫用切〕謂所受爵土也。

載、〔作代切〕舟車。以致物。〔昨代切〕謂所致物。

張、〔陟良切〕陳也。〔陟亮切〕謂所陳事。

藏、〔徂郎切〕入也。〔徂浪切〕謂物所入。

處、〔昌呂切〕居也。〔昌據切〕謂所居。

爨、〔七耑切〕炊也。〔七亂切〕謂所炊處。

柱、〔知庾切〕支也。〔直主切〕謂所支木。

乘、〔食陵切〕登車也。〔食證切〕謂其車也。

卷、〔居亮切〕曲也。〔居戀切〕謂曲者。

祝、〔之六切〕祭主贊詞者也。〔之又切〕謂贊詞。

要、〔伊消切〕約也。〔於笑切〕謂約書。

傳、〔直專切〕授也。〔直戀切〕記所授。

名、〔綿井切〕目也。〔綿政切〕目諸物。

首、〔書九切〕頭也。〔書救切〕頭所擣。

蹄、〔杜奚切〕獸足也。〔大計切〕足相蹙。

〔校異〕

a 擣：叢書集成本・四庫全書本、「向」に作る。 b 尺：叢書集成本、「天」に作る。 c 車：叢書集成本、

「居」に作る。 d 昌：叢書集成本、「呂」に作る。 e 也：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。
笑：叢書集成本、「約」に作る。 g 書九：叢書集成本、「書久」に作る。 四庫全書本、「畜九」に作る。

〔通釈〕

聽、「他丁の切」聞き入れる。

禁、「居吟の切」抑制する。

知、「張離の切」識別する。

思、「息茲の切」思慮する。

評、「蒲兵の切」訂正する。

論、「魯昆の切」論説する。

便、「蒲連の切」欲する。

好、「呼皓の切」善い。

悪、「烏各の切」受け入れられない。

喜、「虚巳の切」悦ぶ。

怨、「於元の切」咎める。

操、「七刀の切」把持する。

〔他定の切〕聞くことをいう。

〔居蔭の切〕抑制のことをいう。

〔張義の切〕知識のことをいう。

〔息吏の切〕思慮のことをいう。

〔蒲困の切〕言葉を訂正することをいう。

〔魯困の切〕論説のことをいう。

〔蒲練の切〕欲したものを手に入れたことをいう。

〔呼到の切〕善しとすることに向かうこと（好む）をいう。

〔烏路の切〕心が受け入れられないこと（悪む）をいう。

〔虚記の切〕悦びの感情をいう。

〔紆願の切〕咎めようとする意識のことをいう。

〔七到の切〕把持しようとする意志のことをいう。

語、〔**仰**挙の切〕言う。
 令、〔**力**丁の切〕使う。
 教、〔**古**着の切〕使う。
 雨、〔**王**矩の切〕天からの潤い。
 種、〔**之**隴の切〕五穀。
 宿、〔**思**六の切〕止まる。
 生、〔**所**庚の切〕育む。
 乳、〔**耳**主の切〕子を生む。
 吹、〔**昌**垂の切〕吐く。
 蒸、〔**章**升の切〕気が吹き出る。
 経、〔**古**靈の切〕東西。
 縁、〔**羊**専の切〕より循う。
 編、〔**補**年の切〕順序。
 封、〔**甫**容の切〕爵位や土地を授ける。
 載、〔**作**代の切〕舟や車に荷物を積む。
 張、〔**陟**良の切〕陳述する。
 蔵、〔**徂**郎の切〕入れる。

〔**牛**据の切〕言葉によって告げることという。
 〔**力**政の切〕使役の言葉（令む）をいう。
 〔**古**孝の切〕使役の言葉（教む）をいう。
 〔**王**遇の切〕雨が上空から降ってくることをいう。
 〔**之**用の切〕種をまくこと（種う）をいう。
 〔**思**宥の切〕太陽や星がとどまるところ。
 〔**色**慶の切〕子を育てることをいう。
 〔**而**遇の切〕子を養うことをいう。
 〔**尺**偽の切〕気を吐き出すことをいう。
 〔**之**勝の切〕気が吹き出て潤すことをいう。
 〔**古**定の切〕横糸（緯）を東西すること（経線）。
 〔**羊**絹の切〕端を一回り飾り付けること。
 〔**步**典の切〕順序通りに並ぶことをいう。
 〔**甫**用の切〕授かった爵位や土地をいう。
 〔**昨**代の切〕積む荷物をいう。
 〔**陟**亮の切〕陳述する事柄をいう。
 〔**徂**浪の切〕物が入るところをいう。

処、〔昌呂の切〕居る。

爨、〔七崙の切〕炊く。

柱、〔知庾の切〕支える。

乗、〔食陵の切〕車に乗る。

卷、〔居充の切〕曲がる。

祝、〔之六の切〕賛詞を詠ずる祭主。

要、〔伊消の切〕要約。

伝、〔直専の切〕伝授する。

名、〔綿井の切〕名前。

首、〔書九の切〕頭。

蹄、〔杜奚の切〕動物の足。

〔昌扱の切〕居るところをいう。

〔七乱の切〕炊いている場所をいう。

〔直主の切〕支えている木をいう。

〔食証の切〕車のことをいう。

〔居恋の切〕曲がったものをいう。

〔之又の切〕賛詞のことをいう。

〔於笑の切〕要約された文書をいう。

〔直恋の切〕伝授されたことを記す。

〔綿政の切〕物に名をつけること。

〔書救の切〕頭の向いているところ。

〔大計の切〕足で踏む。

始、〔式氏切〕初也、對終之稱。

聞、〔亡分切〕聆聲也。

稱、〔尺烝切〕舉也。

譽、〔羊諸切〕稱也。

〔式志切〕緩言有初。

〔亡運切〕聲著於外。

〔尺證切〕舉事得宜。

〔羊洳切〕稱名當體。

平、〔蒲兵切〕均也。

治、〔直基切〕理也。

衷、〔陟弓切〕中也。

裁、〔音才〕制也。

勞、〔力刀切〕勩也。

興、〔虛凌切〕舉也。

累、〔力水切〕連也。

與、〔羊主切〕授也。

比、〔界履切〕近也。

難、〔乃干切〕艱也。

繫、〔古詣切〕屬也。

爲、〔于嬌切〕造也。

遲、〔直尼切〕緩也。

妨、〔敷芒切〕寔也。

屬、〔章玉切〕聯也。

享、〔呼兩切〕獻也。

棺、〔古桓切〕柩也。

〔蒲柄切〕品物定法。

〔直吏切〕致理成功。

〔陟仲切〕處事用中。

〔音在〕體制合宜。

〔力到切〕賞勩勸功。

〔許應切〕舉物寓意。

〔力僞切〕牽連爲敗。

〔余慮切〕授而共之。

〔昆志切〕近而親之。

〔乃且切〕動而有所艱。

〔胡計切〕屬而有所著。

〔于僞切〕造而有所徇。

〔直利切〕緩而有所待。

〔芳亮切〕置而有所寔。

〔時玉切〕聯而有所係。

〔呼亮切〕神受其獻。

〔古患切〕以棺斂。

緘、〔古咸切〕束也。

〔古陷切〕齊謂棺束。

含、〔胡南切〕實口中也。

〔胡紺切〕謂口實。

遣、〔苦演切〕送也。

〔苦傳切〕送終之物。

引、〔以忍切〕曳也。

〔余刃切〕曳車之縛。

臨、〔良尋切〕莅也。

〔力禁切〕哭而莅喪。

〔校異〕

a 僂：叢書集成本・四庫全書本、「稱」に作る。 b 賞：叢書集成本、「嘗」に作る。 c 爲：叢書集成本

・四庫全書本、「而」に作る。 d 刃：四庫全書本、「忍」に作る。

〔注釈〕

(1) 棺束：皮革を用いて棺を縛ること。また棺を縛つた革。『礼記』檀弓上に「棺束、縮二、衡三」とあり、孔穎達は「棺束者、古棺木無釘、故用皮束合之」「棺束とは、古棺木に釘無し、故に皮束を用ひて之を合す」と注を附す。また『礼記』喪大記において、鄭玄は「今齊人謂棺束爲緘」「今齊人は棺束を謂ひて緘と爲す」と注を附し、齊では棺束のことを「緘」と呼んでいたという。

〔通釈〕

始、〔式氏の切〕初め。終の対義語。

〔式志の切〕初めのあることを軽くいつている。

聞、〔亡分の切〕音声を聴く。

〔亡運の切〕音声が外部まで届いている。

称、〔尺烝の切〕取り上げる。

〔尺証の切〕相応しいものを取り上げる(適う)。

誉、〔羊諸の切〕称賛する。

平、〔蒲兵の切〕均一。

治、〔直基の切〕治める。

衷、〔陟弓の切〕中央。

裁、〔音は才〕制裁。

勞、〔力刀の切〕疲れる。

興、〔虚凌の切〕挙げる。

累、〔力水の切〕連なる、しきりに。

与、〔羊主の切〕授ける。

比、〔昇履の切〕近い。

難、〔乃干の切〕艱難。

繫、〔古詣の切〕繫属、つながる。

為、〔干嬌の切〕造る。

遅、〔直尼の切〕緩やかである。

妨、〔敷芒の切〕つまづく。

属、〔章玉の切〕連なる。

〔羊迦の切〕名称が実態にあつてゐることを称賛する。

〔蒲柄の切〕物事に対して法を定めること。

〔直吏の切〕治めて功績をあげること。

〔陟仲の切〕物事の処理にかたよりのないこと。

〔音は在〕体制が適切であること。

〔力到の切〕功勞を褒めねぎらうこと。

〔許応の切〕ものを採りあげてかこつける。

〔力偽の切〕連続して潰える（わずらいとなる）。

〔余慮の切〕授けてともにする。

〔毘志の切〕近づき親しむ。

〔乃旦の切〕動いて艱難がある。

〔胡計の切〕つなげて明らかになる。

〔干偽の切〕造って用いられる。

〔直利の切〕緩やかに待機する。

〔芳亮の切〕置いてつまづかれる。

〔時玉の切〕連なり係わるところがある。

享、〔呼^上兩の切〕献上する。

棺、〔古^上桓の切〕棺桶。

緘、〔古^上威の切〕束ねる。

含、〔胡^上南の切〕（玉を死者の）口中に含ませる。

遣、〔苦^上濱の切〕送る。

引、〔以^上忍の切〕曳く。

臨、〔良^上尋の切〕のぞむ。

〔呼^上亮の切〕神が供物を受ける。

〔古^上患の切〕棺桶におさめる。

〔古^上陷の切〕齊国では棺束のことをいう。

〔胡^上紺の切〕死者の口中に含ませる玉をいう。

〔苦^上伝の切〕死者を送るもの。

〔余^上刃の切〕（棺をのせた）車を曳く綱。

〔力^上禁の切〕哭いて葬儀にのぞむ。

彼此異音辨

假、〔古^上雅切〕取於人也。

借、〔子^上亦切〕取於人也。

乞、〔去^上訖切〕取於人也。

貸、〔他^上得切〕取於人也。

壞、〔音^上怪〕毀之。

敗、〔音^上拜〕毀之。

毀、〔許^上委切〕壞他。

〔古^上訝切〕與之。

〔子^上夜切〕與之。

〔去^上既切〕與之。

〔他^上代切〕與之。

〔戸^上怪切〕自毀。

〔薄^上邁切〕自毀。

〔況^上偽切〕自壞。

風、〔方戎切〕上化下。

〔方鳳切〕下刺上。

見、〔古甸切〕上臨下、又視之。

〔胡甸切〕下朝上、又示之。

告、〔古祿切〕下白上。

〔古報切〕上布下。

養、〔餘兩切〕上育下。

〔餘亮切〕下奉上。

共、〔九容切〕上賦下。

〔九用切〕下奉上。

遺、〔以追切〕有所亡。

〔羊季切〕有所與。

施、〔式支切〕設之。

〔羊至切〕及之。

更、〔古衡切〕因故而改。

〔古孟切〕捨故而作。

去、〔羌舉切〕除之。

〔丘倨切〕自離。

畜、〔勅六切〕聚謂之。

〔許六切〕養謂之。

喪、〔息郎切〕死亡也。

〔息浪切〕失亡也。

忘、〔無方切〕意遺。

〔無放切〕意昏。

巧、〔苦絞切〕善功。

〔苦教切〕偽功。

恐、〔丘隴切〕懼之急。

〔丘用切〕緩也。

還、〔音旋、又音全〕復之速。

〔戶關切〕緩也。

射、〔神亦切〕命中也。

〔神夜切〕以禮也。

取、〔七與切〕制師從己。

〔七句切〕屈己事師。

仰、〔魚亮切〕上委下。〔語兩切〕下瞻上。

大、〔徒蓋切〕凡廣也。〔他蓋切〕其極也。

少、〔施沼切〕凡微也。〔施詔切〕其降也。

焉、〔於乾切〕何也、常居語辭。〔于乾切〕已也、常居語末。

會、〔胡沛切〕相合。〔吉內切〕聚合。

披、〔鋪卑切〕開謂之。〔鋪彼切〕分謂之。

播、〔補我切〕揚謂之。〔補過切〕布謂之。

降、〔古巷切〕下謂之。〔戶江切〕伏謂之。

覆、〔甫六切〕傾也。〔敷救切〕蓋也。

樂、〔五角切〕聲和也。〔力各切〕志和也。

朝、〔陟遙切〕旦日也。〔直遙切〕旦見也。

食、〔時力切〕餐謂之。〔音寺〕餉謂之。

涕、〔他禮虜啓二切、又音弟。〕目汁也。〔他計切〕鼻汁也。

刺、〔七亦切〕刺謂之。〔七賜切〕傷謂之。

奉、〔扶勇切〕承也。〔音捧〕拱也。

父、〔音甫〕人之美稱。〔扶雨切〕家之尊稱。

被、〔音披〕著謂之。〔平義切〕覆謂之。

合、「古盍切」牽和也。

〔胡闇切〕自和也。

〔校異〕

a 邁：叢書集成本、「遇」に作る。 b 舉：叢書集成本・四庫全書本、「與」に作る。 c 亡：叢書集成本、

「忘」に作る。 d 意遺：叢書集成本、「遺意」に作る。 e 於乾：四庫全書本、「因肩」に作る。

〔通釈〕

異音の区別

仮、「古稼の切」他人のものを取る（借りる）。

〔古訝の切〕与える（貸す）。

借、「子亦の切」他人のものを取る（借りる）。

〔子夜の切〕与える（貸す）。

乞、「去訖の切」他人のものを取る（借りる）。

〔去既の切〕与える（貸す）。

貸、「他得の切」他人のものを取る（借りる）。

〔他代の切〕与える（貸す）。

壞、「音は怪」破る。

〔戸怪の切〕破れる。

敗、「音は押」破る。

〔薄邁の切〕破れる。

毀、「許委の切」ものを壊す。

〔況偽の切〕壊れる。

風、「方戎の切」上位者が下位者を教化する。

〔方鳳の切〕下位者が上位者を風刺する。

見、「古甸の切」上位者が下位者に臨む、また視

〔胡甸の切〕下位者が上位者に朝見する、また示

る。

す。

告、「古禄の切」下位者が上位者に謹白する。

〔古報の切〕上位者が下位者に布告する。

養、〔余両の切〕上位者が下位者を育む。
 共、〔九容の切〕上位者が下位者に授ける。
 遣、〔以追の切〕失うこと。
 施、〔式支の切〕設ける。
 更、〔古衡の切〕理由があつて改める。
 去、〔羌挙の切〕除く。
 畜、〔勅六の切〕集める（蓄える）こと。
 喪、〔息郎の切〕死亡。
 忘、〔無方の切〕意識が失われる。
 巧、〔苦絞の切〕よい功績。
 恐、〔丘隴の切〕恐れることが急迫。
 還、〔音は旋、また音は全〕戻ることが速やか。
 射、〔神亦の切〕命中する。
 取、〔七与の切〕師を制して自らに従わせる。
 仰、〔魚亮の切〕上位者が下位者に委ねる。
 大、〔徒蓋の切〕およそ広大なもの。
 少、〔施沼の切〕およそ微小なもの。

〔余亮の切〕下位者が上位者に奉る。
 〔九用の切〕下位者が上位者に奉る。
 〔羊季の切〕与えること。
 〔羊至の切〕及ぶ。
 〔古孟の切〕理由なくして起こす。
 〔丘倨の切〕離れる。
 〔許六の切〕養うこと。
 〔息浪の切〕喪失。
 〔無放の切〕意識がくらむ。
 〔苦教の切〕うわべの功績。
 〔丘用の切〕徐々に（恐れていく）。
 〔戸関の切〕ゆるやかに（戻る）。
 〔神夜の切〕礼節正しく（射る）。
 〔七句の切〕己を曲げて師に仕える。
 〔語両の切〕下位者が上位者を仰ぎ見る。
 〔他蓋の切〕極まったもの。
 〔施詔の切〕下つていったもの。

焉、「因肩の切」〃何ぞや〃の意。語辞として常用。

〔干乾の切〕〃已也〃の意。語尾として常用。

会、「胡沛の切」相互に会う。

〔吉内の切〕聚まり合する。

披、「鋪卑の切」開くことをいう。

〔鋪彼の切〕分かれることをいう。

播、「補我の切」揚げることをいう。

〔補過の切〕布くことをいう。

降、「古巷の切」下降することをいう。

〔戸江の切〕降伏することをいう。

覆、「甫六の切」傾く。

〔敷救の切〕蓋う。

楽、「五角の切」音声が和す（音楽）。

〔力各の切〕志が和す（悅樂）。

朝、「陟遙の切」夜明け。

〔直遙の切〕夜明けに参内する。

食、「時力の切」食べることをいう（食ふ）。

〔音は寺〕食べさせることをいう（食ふ）。

涕、「他礼の切、虜啓の切。また音は弟」涙。

〔他計の切〕鼻水。

刺、「七亦の切」刺すことをいう。

〔七賜の切〕傷つけることをいう。

奉、「扶勇の切」承る。

〔音は捧〕拱く。

父、「音は甫」人の美称。

〔扶雨の切〕家の尊称。

被、「音は披」着ることをいう。

〔平義の切〕覆うことをいう。

合、「古盍の切」（相手を）引き寄せ和合させる。

〔胡閣の切〕（相手に）和合する。

字音疑混辨

上、〔時亮切〕居高定體。

〔時掌切〕自下而升。

下、〔胡賈切〕居卑定體。

〔胡嫁切〕自上而降。

夏、〔胡賈切〕四方廣大。

〔胡嫁切〕萬物盛大。

後、〔胡苟切〕居其後。

〔胡垢切〕從其後。

近、〔巨隱切〕相隣也。

〔巨刃切〕相親也。

被、〔部委切〕所以覆者。

〔部偽切〕所以覆之。

右在字、后字、坐字、聚字。若此類字書皆有上去。一二聲、雖為疑混、而釋文義無他別、不復載之。

〔校異〕

a 隱：四庫全書本、「穩」に作る。

〔通釈〕

字音の混乱の区別

上、〔時亮[●]切^五〕高いところに身を置く。

〔時掌[●]切^上〕下から昇っていく。

下、〔胡賈[●]切^上〕低いところに身を置く。

〔胡嫁[●]切^五〕上から降りてくる。

夏、〔胡賈[●]切^上〕四方が廣大である。

〔胡嫁[●]切^五〕万物が盛大である。

後、〔胡苟[●]切^上〕後ろにある。

〔胡垢[●]切^上〕後ろに従う。

近、「巨隠●上の切」隣りあう。

「巨刃●去の切」親しみあう。

被、「部委●上の切」覆っているもの。

「部偽●去の切」覆うこと。

右には「在」「后」「坐」「聚」字など（も本来挙げるべきで）あり、字書ではどれも上声、去声の区別があるとする。これら上声、去声の二声は混乱しやすいが、意味上の違いはないので、ここでは再録しない。